

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果について

令和7年 10月10日
枚方市立第四中学校

文部科学省が今年4月に実施した、令和7年度全国学力・学習状況調査の結果について、本校の学力や学習の状況を保護者の皆様にお知らせします。結果によると、児童（生徒）の生活習慣と学力には相関関係があることから、引き続き、保護者の皆様にもご協力をお願いいたします。

学力調査の結果

※ 調査結果について
教科や出題範囲が限られていることから、
全国学力・学習状況調査により測定できるのは、学力の特定の一部分です。

学力調査結果の中から、本校と全国の平均正答率（対全国比）をお知らせします。

令和7年度 平均正答率 対全国比		国語	数学
第 四	中学校		

この数値については、
本校の生徒や保護者限
定で公開しています。

※ 理科は CBT による調査のため、IRT スコアをベースに結果を示しています（右参照）。

<学力調査結果の概要>

○国語について

→ 暗記する内容などの知識はある程度力がついてきているものの、思考を深める問題は苦戦している生徒が多い。教師は教科書内容だけでなく、生徒の思考力を引き出せるように、課題の設定や様々な方法（インターネットを使用した調べ学習など）を駆使し、生徒の学習意欲を駆り立てる努力をしていきたい。今回の出題傾向を参考に授業プリント作成に生かしていきたい。

○数学について

→ 授業の中で、知識や技能の定着を図るための活動（小テストをしたり、発問を増やしたりするなど）の機会を増やす。また、無回答率に関して、おおよそ、1 年の一部の内容を除いて、全国平均を上回っている項目があるため、その内容（分野）を中心に、今後、授業の中で、「とにかく何か書く」という意識を持たせるような声掛け等を行う。

○理科について

→ 基本的な知識をもたないと、その上に高度な考察は成り立たないため、基礎知識・技能について小テスト等を繰り返すことで身に付けさせるとともに、今後の授業や定期テストで抽象的な概念を構築できる練習問題を作成していきたい。

令和7年度 全国学力・学習状況調査中学校<理科>について

中学校（理科）は CBT による調査を実施。IRT スコアをベースに結果を示しております。

IRT とは

児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論。
項目反応理論(Item Response Theory)。
異なる問題からなるテストの結果や、異なる集団で得られたテストの結果を互いに比較することができる。
※PISA、TOEIC・TOEFL等の英語資格・検定試験、医療系大学間共用試験等で採用されている。



<参考> 素点方式（正答数・正答率）、IRT方式の比較

※視力検査を例としたイメージ
本資料はイメージを表すことを目的として作成したため、示された7つのランドルト環の大きさ（難しさ）がAさんとBさんで異なっている。

素点方式		IRT方式
得点(スコア)の表現方法	何個のランドルト環（C） を見ることができたか	どの大きさのランドルト環（C） を安定的に見ることができたか
得点(スコア)の例	0.1	0.1
	0.2	0.2
	0.3	0.3
	0.4	0.4
	Aさん 5問/7問 (正答率71%)	Bさん 4問/7問 (正答率57%)

※素点方式の場合は、Aさんの方が正答数（見ることができたランドルト環の数）・正答率が高くなる。IRT方式の場合は、Bさんの方がスコア（視力）が高くなる。

悉皆調査でIRTを導入するメリット



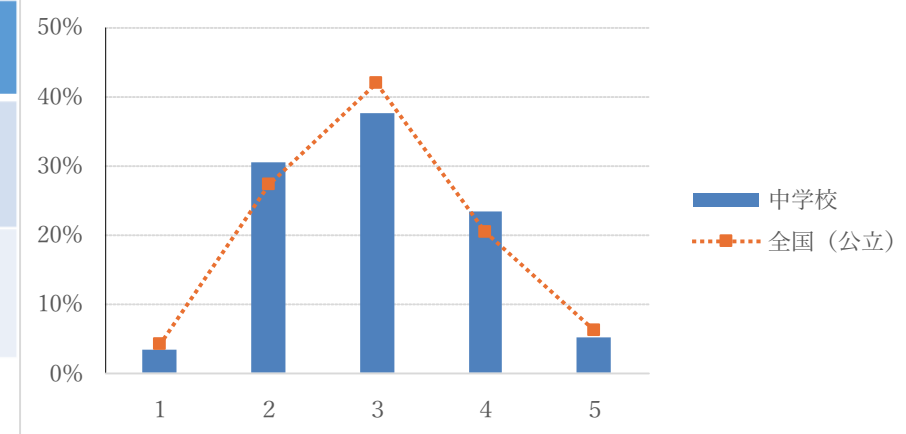
- ① 調査日の複数設定が可能になる。各児童生徒が異なる問題を解く設計にできる。
- ② 今まで以上に多くの問題を使用し、幅広い領域・内容等での調査が可能になる。
- ③ 学力の経年変化を各教育委員会・学校でも把握できる。

学力調査の結果

	平均IRTスコア
第四中学校	
全国（公立）	503

この数値については、
本校の生徒や保護者限
定で公開しています。

IRTバンド分布グラフ



教科に関する調査

成果や課題があった設問

【ちらし】（更新版②）

第一中学校 美術展

毎年、秋に行っている第一中学校の美術展のお知らせです。

私たちが美術の時間につくった作品を展示します。どれもが**いしん**の出来です。

今年は、中学生による作品の説明や小学生向けの体験コーナーもあります。

日 時 令和7年11月15日（土） 10時～16時

場 所 第一中学校 体育館

会場図

体験できる時間（各回30分間）
 ●10時～ ●11時～ ●12時～ ●13時～
 中学生と一緒に、好きな色のタイルを貼って自分だけのペン立てをつくることができます。

第一中学校6年生のみさんへ

四 今年の美術展では、昨年の美術展に登場した小学生の感想をもとに内容を工夫しています。中井さんは、そのことを【ちらし】（更新版②）の の部分に書き加えることにしました。あなたならどのように書きますか。次の

条件1と条件2にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

条件1 今年の美術展の【工夫】のA、Bから1つ選び（どちらを選んでもかまいません）。それと結び付く小学生の【感想の一部】をアからウまでの中から1つ選び、それぞれ塗りつぶすこと。

条件2 条件1で選んだ、今年の美術展の【工夫】と小学生の【感想の一部】との関係が分かるように、接続する語句や指示する語句を使って書くこと。

※ 次のページの枠は、下書きに使ってもかまいません。

解答は必ず解答用紙に書きなさい。

	正答率	無解答率
本校	39.1%	1.8%
全国	31.0%	1.6%

(考察)

大問Ⅰの四、ちらしの読み手に向けて、今年の美術展の工夫について伝える文章を書く問題について、日々の授業の中で自分の考えを発表する機会を設けていることがつながっているように感じる。どのように表現すれば相手にうまく伝わるか、また相手が納得してくれるか、工夫して発表内容を考える生徒が増えてきている。この問題についても、自分が取り組んできたことに置き換えて考えることができていたように感じる。

四……………で聞かれた部分には、兄弟が目的を達成できなかった場面のもとに続く話が書かれています。あとに続く話は、「一板水の束」にはありますが、「二釣の話」にはありません。このような展開になっていることは、「二人の兄弟」という物語においてどのような効果があるのでしょうか。あなたの考えとその理由を具体的に書きなさい。理由を書く際には、物語の内容を取り上げて書きなさい。

なお、読み進めて文章を直したいときは、線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

※ 左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。

	正答率	無解答率
本校	24.0%	21.8%
全国	17.1%	28.1%

(考察)

大問3の四、「一 榎木の実」に書かれている場面が、「二 釣の話」には書かれていないことによる効果について、自分の考えとどのように考えた理由を書く問題である。

自分の考えを表現する際、なぜそう考えたのか根拠をもって説明し、相手にわかりやすく伝えることを授業で意識して取り組んでいる。その取り組みが少しずつ成果としてつながっているように感じる。また、無解答率が全国に比べて低く、自分の考えを書こうという習慣が身についていると考えられる。

成果や課題があった設問

目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができるかどうかをみる

	正答率	無解答率
本校	53.6%	20.5%
全国	45.2%	20.2%

(考察)

文字式を利用して数の性質を証明する問題であるが、全国平均を5ポイント以上上回っており、文章を理解し、説明する力がついていると考えられる。これは、日頃の授業の中で、考えたことを言葉や文章で「説明する」ことを積極的に取り入れているからであると考えられる。

素数の意味を理解しているかどうかをみる

	正答率	無解答率
本校	25.4%	0.9%
全国	31.8%	0.7%

(考察)

大問 1 の素数をすべて選ぶ問題の正答率が、大阪府や全国に比べ、5 ポイントほど低いことや、無回答率も少し上回っていることから、数の集合の内容に関して、苦手意識を持っているように考えられる。大問5や7も同様であり、一部の知識の定着が不十分であり、授業やテストなどで適宜復習問題などを取り入れ、知識の定着を図りたい。

<理科>

成果や課題があった設問

【成果】

科学的な探究を通してまとめたものを他者が発表する学習場面において、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現できるかどうかをみる

水道水、精製水について探究したことを発表しています。

水道水について

河川 浄水施設 家庭

・河川の水などを顕微鏡で観察すると、いろいろな生物がいるので、安全に飲むための工夫をしている。

・河川の水などを浄水施設でろ過し、塩素を注入したものを水道水として利用している。

精製水について

・理科の実験で使用する精製水は、水道水を蒸留したり、ろ過したりしてつくられ、販売されている。

・精製水とミネラルウォーターの違いは何かを現在調べている。

探究を通じて、さらに疑問に感じたことに着目して振り返ります。

探究を通じて、はじめの考えから考えが変化したことに着目して振り返ります。

探究を通じて、身近な生活とのつながりを感じたことに着目して振り返ります。

探究を通じて、身近な生活とのつながりがあることが分かりました。

探究を通じて、身近な生活とのつながりがあることが分かりました。

（6）

上の発表を見て、水道水や精製水に対し、Bさん、Cさん、Dさんを参考にして、あなたの振り返りを書きなさい。

振り返り

	正答率	無解答率
本校	88.6%	5.2%
全国	79.4%	9.9%

（考察）

大問Ⅰ（6）の水道水と精製水に関する2人の発表を見て、探究の過程におけるあなたの振り返りを記述する問題において、全国平均を10ポイント近く上回る結果となった。実験やテスト、探究活動だけでなく、日ごろからの振り返り活動の成果が表れたものと考えられる。「考えて書く」活動の繰り返し、無解答率の低下にもつながっていると考えられる。

【課題】

水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる

地域からしみ出した水について調べよう

顕微鏡からしみ出した水がたまっていたので、この水を選び顕微鏡で観察しましょう。

下のよう4種類の生物を観察できました。

観察した様子を見せよう。

生物1 生物2 生物3 生物4

生物2、生物4の動画 出典 茨城県科学センター

これまでの学習内容を活用して呼吸を行う生物はどれか、考えてみましょう。

呼吸を行う生物は・・・

（4）

呼吸を行う生物をすべて選びなさい。なお、生物1から4のすべてを選んでかまいません。

生物1 生物2 生物3 生物4

	正答率	無解答率
本校	22.4%	0.0%
全国	29.7%	0.2%

（考察）

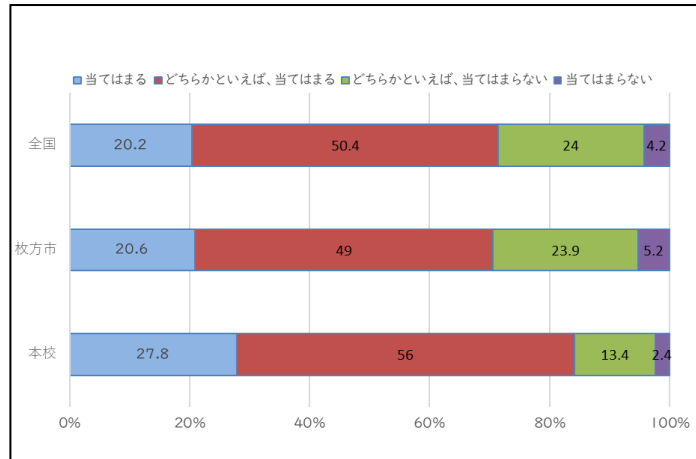
大問Ⅰ（4）の生物1から生物4までの動画を見て、呼吸を行う生物をすべて選択する問題で課題が見られた。単なる知識で答えるのではなく、問題文を読み解き、考察して解答する問題であった。基本的な知識がふそくしている、あるいは身につけた知識をどのように活用して正解を導くかが身につけていないためと考えられる。

質問紙に関する調査

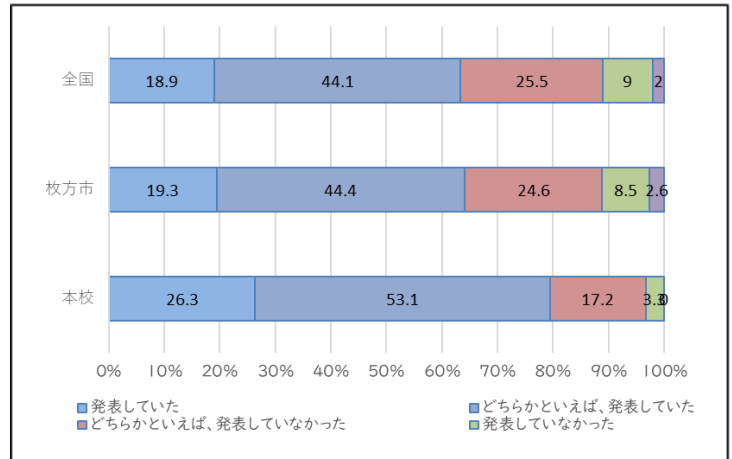
※帯グラフは、左から「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」を示しています。
※折れ線グラフは、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計数値となっています。
※無回答があるため、帯グラフの合計数値は100にならない場合もあります。

【成果のあった項目】

1、2年生のときに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか。



1、2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫していましたか。

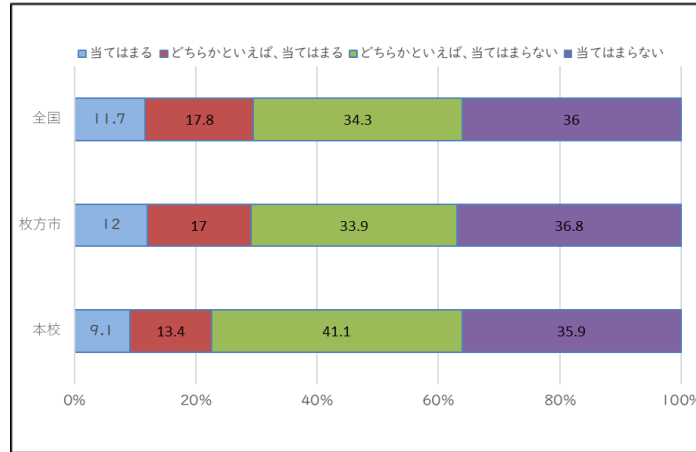


（考察）

どの教科においても、ただ「知識を身につける」のではなく、「得た知識をどのように活用するか」を意識した授業づくりに取り組んでおり、それが少しずつ力となって結果につながっている。「自分の考えを持つ」こと、そしてそれを自分なりに工夫して「まとめる（言語化する）」ことは、将来必要となってくる力である。今後は、教科の枠を超えて学習したことを生かせるよう教科部会や学力向上委員会を活性化させて取り組みを進めていきたい。

【課題が残った項目】

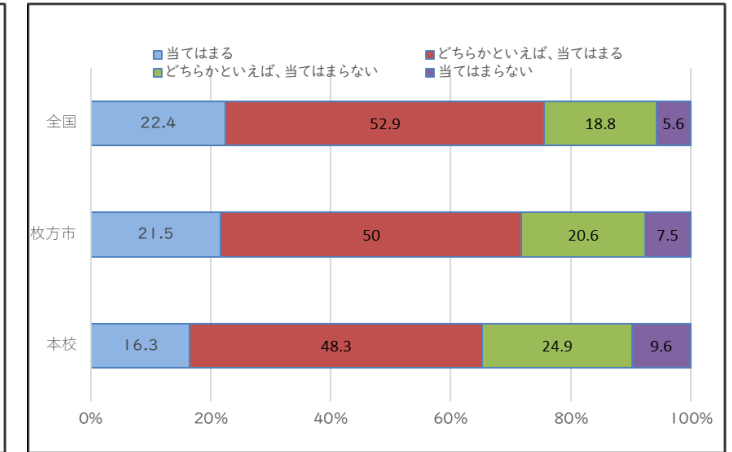
地域の大人に、授業や放課後などで勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがありますか。（習い事は除く）



（考察）

地域とのつながりが希薄化しつつある昨今、自分が生まれ育った地域に愛着を持つ子どもが少なくなっている。そしてそれは、四中でも数字として顕著に表れている。ゲストティーチャーとして地域の方を招いたり、職場体験でさまざまな地域の方と関わるなど、地域社会とつながる機会を、その地域の学校である四中が中心となってつくっていく必要がある。

地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。



分析結果を踏まえて今年度中に取り組んでいくこと

(1) 授業改善について

今年度は、「幸せな人生を生きあうために必要な6つの力」に授業でつなげることを意識した『リンク6』が学力向上テーマとなっております。6つの力とは、「自分を知る」、「自分で決める」、「チャレンジ・行動」、「振り返り・改善」、「やりぬく」、「コミュニケーション力」です。それぞれの授業のどの場面でその力をつけさせていくのか、学力向上委員会や教科部会で話し合いながら研究を進めております。

今回の調査の結果から、学習した内容を使ってノートにまとめたり、工夫して発表したりすることができるようになってきた反面、テストなどになると、得た知識をどう使うか、どの場面で使うかにつながっていないことがわかります。用語や公式は覚えられていても、正しい理解ができていない部分があるためにそのような結果になっていることが考えられます。

得た知識や技能を適切に、また教科を横断して活用できるよう、普段の授業で生徒に考えさせる課題の工夫や、教師の発問（問いかけ）の研究など、より生徒が思考できるような場面を日常的に取り入れていきます。

具体的には、従来の知識伝達型の授業ではなく、仲間と「コミュニケーション」を取りながら課題解決をしていくような授業や、「自ら学びを選択して」進められるような授業を適宜取り入れていけるよう研究を進めてまいります。教師主導ではなく、教師が伴走者として、生徒が自ら学び、考える授業をめざして授業づくりを行ってまいります。

一方で、各教科で知識の定着を細かく見取るために小テストや単元テストの実施を随時行い、問題の内容についても、設問の工夫を行い、より生徒が思考を深めながら取り組める問題を出題できるよう、教科の教員で話し合いながら工夫して参ります。

(2) 家庭学習について

昨年度記載した「各教科から課す宿題の精選」を行っており、「宿題」というより、単元テストに向けた勉強や単元の最後に提出すべき課題など、見通しをもってどう学習を進めるか自分で決められるようにしています。また、長期休業における宿題についても、ただワークに取り組むのではなく、学習したことを使って、自ら考え、調べ、表現するような、少し背伸びをして「チャレンジ」する内容のものに変わった教科もあります。学習に取り組むお子さまの姿を見守っていただくとともに、お子さまが悩んでいるときには、少し声をかけてあげてください。

ご家庭におきましても、本校の学力向上における取組をご理解の上、お子さまが主体的に学びに向き合えるよう、引き続きサポートをよろしくお願いします。